金関先生のこと

角地　幸男

初めてお目にかかったのは、ドナルド・キーンさんの紹介だった。金関先生はキーンさんの「百代の過客」の翻訳を朝日新聞夕刊に連載中で、こっちは同じキーンさんの「日本文学史」（中央公論社「日本文学の歴史」の旧版）の翻訳を数冊出したばかりだった。といっても、金関先生が正真正銘の翻訳家であるのに対して、こっちはキーンさんとの友達づきあいの延長として、たまたま翻訳をやらせていただいていたに過ぎない。

初対面の場所は、渋谷の喫茶店だった。コーヒーか何かを飲みながら、先生はガートルード・スタインの話をなさり、こっちはもっぱら馬鹿の一つ覚えでエリオット・ポールの話をしたような気がする。すでに雑誌「ユリイカ」に、先生はガートルード・スタインの評伝の連載を始めておられたのではなかったかと思う。エリオット・ポールは第一次大戦に従軍してパリに行き、そのままパリに住みついてアメリカの新聞のパリ支局で文芸欄を担当し、第二次大戦が始まるまでパリにいて、その間に雑誌“Transition”の編集に携わり、そこにガートルード・スタインが初期の作品を発表していたのだった。ガートルード・スタインとエリオット・ポールは、だから、二つの大戦をはさんだ時期にパリで会っているはずだった。

事実、ポールがスタインに何度も会っていたことは、のちに金関寿夫訳のガートルード・スタイン「アリ

ス・B・トクラスの自伝」を読んで知った。エリオット・ポールが陥落直前のパリを舞台にした小説“The Last Time I Saw Paris”（最後にパリを見た時）を書いて一躍有名になったのは、アメリカに帰ってからである。パリ時代のポールは、有能な編集者だったらしい。スタインはポールのことを、「ものの良し悪しがちゃんとわかってる人」と書いている。そういえば、この「自伝」に登場してくるピカソ、アポリネール、ヘミングウェイなどとの交遊をフィクションまじりに映像化した“Waiting for the Moon”（月の出を待って）の話も、この時出たような気がする。或いは、別の機会だっただろうか。とりとめもなく話が続き、二時間ばかりが、あっという間に過ぎたのを覚えている。

帰り際に先生は、「つまらないものだけど…」と小さな本を下さった。「アメリカは語る（第一線の芸術家たち）」という講談社の現代新書の一冊で、先生がアメリカの芸術家を訪ね歩いた時のインタビューをまとめたものだった。先生の著書を手にしたのはこれが初めてで、やがてその文章の軽快な語り口がやみつきになった。こちらにはお返しにさしあげるべき自分の著書というものがなくて、しかたなく数年前に集英社版「吉田健一著作集」の月報に書いた小文を後からお送りした。折り返すように、あの一種独特な、のたくるような大きな文字の葉書をいただいた。初対面の後輩にとっては、身にあまる丁重な礼状だった。

脇道にそれるようだが、ここで筆者とキーンさんとの付き合いについて語っておかなければならない。それがないと、金関先生との話が続かないことになる。新聞社の仕事でキーンさんに初めてお目にかかってから、すでに二十年近くが過ぎていた。うまが合ったのか、日本にいる時は毎月のように駒込の自宅に食事に呼んでくださった。まだ毎日新聞にいらした頃の徳岡孝夫さんとも、キーンさんのところで何度かお目にかかったことがある。

今でもそうだがキーンさんという人は、海外の日本文学研究の第一人者というよりは、むしろ話題の尽きない一人の魅力ある話し手という感じだった。だから不思議なことに、キーンさんから特に日本文学について何かを教わったという記憶がない。教わったのは、むしろおいしいワインやチーズの選び方であり、ニューヨークではどこの古本屋に行けばいいとか、こっちにとっては門外漢のオペラや室内楽のレコードの話が多かった。フォイアマンのチェロ、ビョルリングのテナーにやみつきになったのもキーンさんのお蔭である。筆者とキーンさんとでは年齢は父子ぐらい離れていた。しかし、すでに友達づきあいと言ってよかった。それをいいことに、なにかの折りに、ふと、仕事の愚痴でも言ったらしい。事実その頃はひどく疲れていたし、本もろくに読む暇がなかった。気の合う先輩が相次いで社を去り、新聞社の仕事そのものにも倦怠感を覚えるようになっていた。自分のやるべきことは終ったのではないか、という迷いもあった。キーンさんのところでご馳走になるたびに、愚痴のようなものが何度か出たようだった。

ある日、突然、金関先生から電話をいただいた。先生は前置きなしの切口上で、こうおっしゃったのだった。キーンさんから聞きましたけど、いっそのこと、大学に来ませんか、と。こちらは人前で話すのが大の苦手で、まともな著書もなく、翻訳数冊と雑文数篇しか出していなかった。大学院を出たわけでもなく、留学したわけでもない。もとより学問と名のつくものには縁がなかった。だから資格がありません、とお答えした。先生がおっしゃるには、英字新聞の経験を加味すれば立派な資格です、やってみて肌が合わなかったら、やめりゃあいいじゃないですか、とにかく履歴書を送ってください、心当たりを幾つかあたってみますから、というありがたいお言葉だった。

それからどのくらいしてか、次にお目にかかったのは先生の紹介で今の大学に入れていただいて間もなくの

ことだった。まわりにほとんど店のない大学近くのレストランで、ビールと昼のカレーライスを御馳走になった。先生は胃を切る手術を終えられたばかりの時で、たしか笑いながら、こんなことをおっしゃったのを覚えている。同じ先生でも、医者ってのは、えらいもんですね。ぼくら、教室で少しぐらい間違ったことを教えても、どうってことないけど、医者がちょっとでも間違えたら、こっちはお陀仏ですからね、たいしたもんですよ、と。今から思えば何から何まで知らない新参者のこっちが、なにかと固くなっていたのをほぐそうとなさって、そんな話をしてくださったに違いない。

研究室が隣同士であるにも拘らず出講日がかけ違って、大学では年に数回しかお目にかかれなかった。なぜかいつもエレベーターの中でばったり会って、そのまま先生の研究室へと誘われた。こっちの書いた未熟な論文を、かならず読んでくださっていて、こんどの、あれ、なんだったか、そう、吉田健一と連歌の話、あれ、よかった、いい文章を書くなあ、あなた、と褒めてくださった。先生は褒め上手だった。こっちとしては、そのたびにソファの下にもぐり込みたい気持と、素直にうれしい気持と半々だった。

二年前、雑誌「新潮45」にキーンさんの書き下ろし原稿を同時進行で毎月訳していく「明治天皇」の連載を始めた時、真っ先に電話を下さったのも金関先生だった。あれ、いいですよ、実にいい、あの呼吸で続けていけばいいんですよ、と。この先何年続くか皆目わからない初めての連載で途方に暮れていた筆者にとって、この一言がどれだけ力になったかわからない。

そういえば、先生がやはり朝日新聞夕刊に翻訳を連載なさったドナルド・キーン「声の残り」の企画は、もともと筆者の発案だった。吉田健一が昔「ユリイカ」に連載した「交遊録」のようなものが頭にあって、親しい友人たちとの交遊を語ることでキーンさん自身の自叙伝がおのずと語られるような形になればいいと思って

いた。実は自分でいつか翻訳するつもりで、キーンさんに書くことを勧めていたのだった。ところが当時、朝日新聞の客員編集委員だったキーンさんは何かの折りに朝日の人に、この企画をしゃべってしまったらしい。その場で連載が決まり、翻訳者は当然のことながら朝日新聞に絶大な信用のある金関先生になってしまった。だめじゃないですか、大事な企画を、そんなところで気軽にしゃべってしまっちゃ、とキーンさんを責めた記憶があるが、お蔭で読者は金関先生の名調子を再び朝日の紙上で堪能することになった。

新聞のコラム形式の連載であったため一回分が短く、しかもゴシップ風で、こっちが思い描いていたものとは内容、性格ともに違ったものになってしまったが、読んでいてすぐ終わってしまうのが惜しいような連載だった。ところが文芸誌の編集者仲間では、あの翻訳はあまり好評ではなかったようだった。交遊録である以上、いくら翻訳とはいえ「三島」とか「谷崎」とか世話になった相手を呼びつけにするのは不自然で、キーンさんのふだんの口調から言ってもそぐわない、かりに原文がそうであったとしても、日本語にはそれなりの処理の仕方があるはずだ、というのが主な理由だったらしい。つまりキーンさんの交遊録である以上、これはあくまで「三島さん」であり、「谷崎先生」でなければならないというのだった。

この手の批判に対して、キーンさんが毅然として金関先生を擁護した姿が今でも忘れられない。キーンさんは、そういう批判があることに触れた後で、筆者に向かってこう言ったのだった。いろいろな考え方はあるでしょうが、私はあれでいいと思います。結果的に読者に私が生意気な人間のような印象を与えることになったとしても、私はいっこうに構いません。敬語をあえて省く訳し方は翻訳者として金関さんの一つの見識を示したもので、文句のつけどころのない立派な仕事だと思います、と。キーンさんは、常に金関先生の翻訳に全幅の信頼を置いていた。

大学に移った当初、日本の大学というのは妙なところで…と、何も知らない新入りに先生はいろいろ大学という世界の処世の勘どころを教えてくださった。外の世界からいわば中途採用になった者の目から見ると、たしかに大学というところは妙な世界だった。大学の中だけで育ってきた大学の先生という存在自体が、どうにも妙な人種に見えてしかたなかった。世間では通用しないことが、そこでは堂々とまかり通っているのだった。世の中の常識とは一風変わった世界であることは、金関先生のお話からもおぼろげながら呑みこめた。先生もまた生粋の大学教授でいらしたが、同時に外の世界にも大いに足を突っ込んでいらしたから、そのへんの機微がよくおわかりだったのだと思う。それにしても、遠慮なく何でも話せる大先輩が同じ大学にいるということは何より心強いことだった。

それからしばらくして、アメリカで評判になったキーンさんの新しい自叙伝 “On Familiar Terms” (1994) が金関先生の訳で本になった時、これまでに増して先生ならではの軽快なリズムが走り始めた感じだった。まるでアメリカの小説を読んでいるような錯覚に陥ったものである。これは勿論、自叙伝の筆者であるキーンさん自身が小説の登場人物のような半生を送ってきたということも与かってあずかってあまりある。しかし他の訳者であったら、ああはうまくいかなかったはずである。いつだったか、キーンさんがこんなことを言っていたことがあった。自分の本の日本語訳を読んでいて、時々、自分が最初から日本語で書いたのではないかと錯覚することがある、と。おそらく徳岡孝夫さんがキーンさんの文学史近世篇を訳した時がそうであったに違いないし、それ以上に金関先生の「百代の過客」や自叙伝「このひとすじにつながりて」の訳業がそうであったのではないかと思われる。

先生は勿論、翻訳者として数少ない本物の一人だったが、文章の書き手としてもすぐれていた。或いはこれ

は同じことを言っているのかもしれない。すでに触れたガートルード・スタインの評伝は、のちに同じ出版元の青土社から「現代芸術のエポック・エロイク（パリのガートルード・スタイン）」という題で本となり、読売文学賞を受けた。その洒脱な構成の趣向も含めて、自在闊達な文体には他の追随を許さぬものがあった。

その昔、神戸大学におられた金関先生を東京に連れ出した張本人はキーンさんである。すでにお二人は、同志社大学のオーティス・ケーリさんを介して知り合った旧知の仲だった。まだ都立大学に、篠田一士さんが健在だった頃の話である。都立大で教えていた佐伯彰一さんが東京大学に籍を移すことになったらしい。篠田さんは急遽、後任のアメリカ文学の教授をさがさなければならなかった。たまたま篠田さんから相談を受けたキーンさんは、すかさず金関先生の名前を挙げた。キーンさんの推薦で篠田さんと会った金関先生は、その場ですんなりと都立大学に来ることに決まったらしい。結局これが縁で、先生は終生、東京に住み着かれることになったのだった。

そういえば、キーンさんと金関先生にまつわるエピソードで、おもしろい話がある。キーンさんが、まだ東京とニューヨークに半年づつ住むようになる前のことだった。キーンさんは、ある年、一学期だけコロンビア大学の講義を留守にしなければならなくなった。その時、キーンさんの代行を務めたのが金関先生だった。先生はかつてコロンビア大学の留学生だったから、なつかしさもあって二つ返事で引き受けられたと聞く。たしか、明治文学に関する講義かなにかだったと思う。ニューヨーク滞在中、金関先生ご夫妻はハドソン川を見下ろすキーンさんの十九世紀風アパートを借りて、半年間そこに住むことになった。ここからが、本題である。キーンさんの書斎の見上げるような壁一杯に埋まった大きな書棚の一隅に、おなじみの平凡社の百科辞典が並んでいた。ある時、必要があって金関先生は、その中の一冊を抜き出した。その巻の扉を開けて、先生は心底

驚いたそうである。そこには、「金関丈夫」というなつかしい筆跡があった。先生のお兄さんの名前だった。

どうして、そういうことになったのか。戦後の一時期、台湾で日本語の本が大量に出まわり安く売られたことがあった。キーンさんによれば、コロンビア大学在学中に知り合った親友の一人が戦後、台湾副領事に就任した。その親友はキーンさんが日本文学の研究をしていることを知っていて、欲しいものがあったら知らせるように連絡してきた。キーンさんのもとに送られてきた目録には岩波文庫、有朋堂文庫など月並みなものが多かったというが、その中に平凡社の百科辞典もあった。金関先生のお兄さんにあたる金関丈夫さんは、戦前の台湾帝国大学で人類学教授を務めていた。日本へ引き上げて来る時に、蔵書をかなり始末したらしい。その中に、平凡社の百科辞典があったということになる。お蔭で先生は、はるばるニューヨークくんだりまで来て、お兄さんの蔵書とめぐりあうという奇遇に見舞われたのだった。

このニューヨーク滞在の時だったか、それとも別の時だったか、とにかく金関先生がニューヨーク滞在中、なにかのことで三島由紀夫と会って話を交わしたことがあった。三島さんは、あとでキーンさんに次のように言ったそうである。たいていの日本人はニューヨークで会うと変な日本人になっているものだが、あの人は、ちっとも変わらない、日本にいる時とまったく同じだ、不思議な人だね、と。これは、ニューヨークにいる先生が日本にいる時と同じ、本物の金関寿夫だった、ということでなければならない。

こんな話をしていると切りがない。先生はダンディだった。いつだったか誰かの授賞パーティで、先生と大江健三郎が立ち話をしていた。大江さんは礼儀正しく、先生はいつもの瓢々とした金関先生だった。アメリカの詩の話でもしているようだった。話がはずんでいたので、口をはさむことが出来なかった。老いてますます瀟洒な雰囲気をたたえる先生の前で、ノーベル文学賞をもらったばかりの大江さんが心なしか野暮ったく見え

たのを懐しく思い出す。

これまで幾つかの大学でお世話になった先生方の中で、なに気兼ねなく、口から出まかせに小説から詩、詩から批評、批評から歴史、歴史から芝居、芝居から…という具合に話題を転々とし、なお大きな懐に抱えられているように、安心して心ゆくまで喋ることの出来た大先輩は、金関寿夫先生と西田馨先生のお二人だけだった。その金関先生が逝かれ、西田先生もほどなく停年で退職された。なぜか新聞社をやめる前後数年間に襲われたと同じ寂寥感が、今ときどき蘇ることがある。やってみて肌が合わなかったら、やめりゃあいいじゃないですか…。最近しきりと、あの、電話の向こうの、先生の声が、耳に響く。

（城西大学女子短期大学部講師）